



ALPS

BETTER LIFE

>>> 自分時間

ボランティア活動・社会貢献活動 <<< 第2回

電動車椅子サッカーで、 地域を、観客を熱くしたい!!

選手が監督を募集?

2019年11月、サッカー関係の掲示板で「監督募集」の投稿を見つけました。選手やコーチ、ボランティアの募集は見たことがありましたが、監督を募集していることに正直驚きました。しかも、監督募集の投稿記事を書いていたのはプレーヤーです。今思えば、その驚きが私の背中を押してくれました。思い切って連絡をしたところ、返信は「まさか応募がくるとは思っていませんでした」とのこと(笑)。話を聞いてみると、チームでは定期的かつ長期的に練習に参加でき、チームと関わることでできる監督やコーチがいけないことに悩んでいたそうです。私はサッカー観戦は大好きなのですが、本格的な競技経験もなく、趣味でフットサルをやっていた程度でした。電動車椅子サッカーについても、何度か試合を見たこと

があつたくらいです。ド素人である私が果たして監督を務められるのだろうかという不安はありましたが、一步踏み出したからには、もうこれはやるしかない! ということで2020年1月からチームと関わり、正式に監督に就任することとなりました。それが私のチャレンジの始まりでした。

電動車椅子サッカーを知っていますか?

皆さんは電動車椅子をご存知ですか? その名のとおり、電動で動く車椅子です。電動車椅子サッカーのプレーヤーは、筋ジストロフィーなどの難病や脳性麻痺等により四肢に重度の障害があるため、足で走ることができません。しかし、電動車椅子に乗れば、走ることもドリブルをすることもでき、パスやシュートを打つこともできます。シュートをブロックすることもできます。それらの動きを手元にあるジョイスティック(レバー)1本で制御しています(いつもその器用さと感覚の鋭さに驚かされています)。サッカーは足を使う競技ですが、電動車椅子サッカーは、電動車椅子の前にフットガードという車のバンパーのようなものをつけ、そのフットガードでボールをコントロールする競技です。男女混合の4対4で試合をします。パスを回したりドリブルをしながらゴールを狙うという点では、サッカーと同じですが、2on1といって、ボールに対して味方同士2人以上が3m以内に参加すると反則となり、間接フリーキックとなってしまうなど、電動車椅子サッカー固有のルールもあります。正直、こうしたルールを覚えるのが難しいです。ちなみに、電動車椅子のスピードは10km以下と定められています。ジョイスティック1本でそのスピードを出しながら、ボールをコントロールする姿は本当に神技です。ぜひ一度体験してみてください!



電動車椅子サッカーチーム
YOKOHAMA BayDream 監督
嶋田 慶一

。.....
[しまだ・けいいち] 1980年川崎市生まれ、現在は横浜市に在住。大学卒業後、2004年より横浜市職員。障害者差別解消などの業務に携わる中、障害のある人となない人の共生社会の構築をライフワークとし、2020年より現在の活動を行っている。



>>> ボランティア活動・社会貢献活動



現在20代～30代で構成されるYOKOHAMA BayDreamのメンバーたち

YOKOHAMA
BayDreamとの出会い

YOKOHAMA BayDreamの歴史は古く、設立は1993年、現在27年目を迎えています。この間、メンバーの入れ替えなどもありましたが、継続的に活動を続けています。

現在、メンバーは20代から30代まで男性6名、女性1名の計7名という構成です。全員、重度の身体障害があるため、日頃から電動車椅子を使用しています。スタッフは私を含め3名、そのほか介助者やボランティアスタッフなどが数名います。毎週土・日祝日（月4回程度）を練習日とし、横浜市や町田市を中心に活動しています。

私は初めてチームの練習を見学した時、パスの正確さやスピードに驚きました。直径33cmのボールは足で蹴ると痛みを感じるほどの重さがあり、それが体育館の床面を滑ってくるのかなり迫力があります。

監督やスタッフの役割

次に、チームスタッフの役割について、ご紹介します。まずは、私が務める監督の役割ですが、チームの指揮統括、試合時のスタメン・選手交代の決定、練習や会議の仕切り、スケジュールの管理、練習の年間計画立て、目標立てなどです。さらに、2名のコーチとも連携しながら、こうした役割を担うこととなります。

そのほか、チーム活動をしていくうえで重要な役割を担うのが、ボランティアスタッフです。練習会場の準備や練習中のボールのセット、試合や練習のビデオ撮影、選手の個別サポートなど役割は多岐にわたりますが、練習を積み重ねるためには、ボランティアさんの力が欠かせません。現在、学生を中心としたボランティアさんがサポートしてくださっていますが、まだまだ人が足りないというのが実感です。学生や社会人の中には授業や社会貢献活動の一環として参加してくださる方もいますが、継続的な参加が課題の一つとなっています。

継続的に参加してくださるボランティアさんには、定期的に練習日程を伝えるなど

して、なるべくコミュニケーションを図るよう努力はしているのですが…。日本人の気質で「ボランティアとして登録した以上は、なるべく参加しなければならぬ」と考えてしまうのでしょうか。チームとしては、参加できるときに来てくれればよく、一緒にこのチームでの活動を楽しんでくださればよいのです。私自身も監督という立場ですが、横浜市職員であるため、当然業務が優先されますし、3人の子どもがいるため、家族サービスもしなければならず、参加できないときは無理をしないようにしています。

ですので、ぜひYOKOHAMA BayDreamでのボランティア活動に興味がある方は気楽な気持ちでご連絡ください！1人でも多くの方からのご連絡をお待ちしております。

なぜ、こんなにボランティアさんの話に触れたかというと、実は、私がこの競技に関わるようになって最も驚いたのは、選手たちのご家族がチームのボランティアスタッフとして重要な役割を担っていることです。自宅から練習会場までの送迎も、練習中の飲水や身体的介助、選手個人のサポートもご家族に委ねられているのが実情です。呼吸器トラブルやマシントラブルへの対応など、専門的知識を一定程度要するサポートが必要な場合もあり、練習のたびに、毎回ご家族がサポートをしてくださっています。チームの活動を継続していくうえで、ご家族の役割がとても大きなものとなって

おり、本当に感謝の気持ちでいっぱいでは
ありますが、ボランティアさんの数を増や
すことで、もう少しご負担を減らすことが
できればと思っています。

将来的には、ご家族には「サポーターとし
てチームに関わっていただけるような体制を
つくらなければならないと思っています」。

障害のある人が参加する スポーツとの関わり

少し話はそれますが、私と障害のある人
が参加するスポーツとの関わりについて、
振り返ってみたいと思います。

2016年にさかのぼりますが、当時、
世間はリオパラリンピックを前にして、さ
まざまな競技が盛り上がっていました。い
わゆるパラアスリート（私は、あまりこの
言い方は好きではない）と呼ばれる方々が
CMやスポーツ番組に登場するなど、以前
では考えられないような盛り上がりであっ
たと記憶しています。

しかし、私の中では、パラリンピックは
盛り上がっているけれど、その競技の国内
大会も同じく盛り上がっているのだろうか？
各地のチームはどのように活動してい
るのだろうか？ そんな疑問がある中、
たまたま縁あって、車椅子ラグビーの「横
濱義塾」というチームに関わることになり
ました。車椅子ラグビーはパラリンピック
競技ですが、私の関わりとしては、チーム
のファン（応援団）という立場です。

どうしても、「障害」と「スポーツ」が重
なると、人々の競技への見方が、競技性の
側面以上に「障害があってもがんばってい
る」といったような「感動」の対象であつ
たり、「障害のある人の活動を支援したい」と
いったような「支援」の対象であつたりす
ることに違和感を覚え、他の競技と同様に
「応援」をしたいと思ったのです。

ルールや選手、戦術やテクニクを知れ
ば知るほど、競技への関心が深まり、面白
さも増していき、いつしか好きなスポーツの
一つとなり、競技やチーム、選手たちへの愛
着が深まっていきました。試合があれば、
友人たちとともに横断幕を手作りしたり、
多くの人に呼びかけ応援団を組んで大声で
声援を送ったり、応援を楽しんでいました。

YOKOHAMA Bay Dreamで 監督となった私がやりたいこと

しかし、応援という形でチームをサポー
トする中で感じたのは、残念ながらそれを
楽しむ機会や、その魅力を多くの人に知っ
てもらう機会が限られていることでした。

実際に全国大会等の公式戦を観戦してみ
ると、観客数は少なく、観ている人もあま
り応援している様子はありませんでした
（トップクラスの選手が勢揃いし、スーパ
ープレーを連発させているにもかかわらず
ずー）。応援の輪を広げようにも、大会開催
が年に1〜2回程度しかなく、大会について
の広報も十分ではありません。

パラリンピック競技で、かつ日本代表ク
ラスの選手であれば、スポンサー企業など
からのサポートもありますが、代表選手で
ないとサポートを受けられず、何から何まで
自分でやらなければなりません。

私は横濱義塾のファンになってから、「外
からチームを応援するだけではなく、各地
域で活動するチームが、その活動を地域に
もっともっと知ってもらうことで、地域社
会のスポーツ文化の一つとして発展してい
くような活動ができないだろうか。また、パ
ラリンピック競技や代表選手だけでなく、
競技を志す選手たちの競技環境を向上させ
ることはできないだろうか」という気持ち
を強くしていました。そんな思いを持つ中
で、YOKOHAMA Bay Dreamに出
会ったわけです。

YOKOHAMA Bay Dreamと出
会えたこと、さらに監督という立場になれ
たことは、こうした思いを具体的な行動に
つなげていく大きなチャンスであると感じて
います。YOKOHAMA Bay Dream
をもっと多くの人に知ってほしい、私たち
の活動エリアである横浜市や町田市の方々の
生活の一部になれるよう、情報発信して
いきたいし、試合を見に来ていただき、応
援活動を通じて地域のみなさんとチームが
成長していけたらと考えています。

地域のみなさんの予定表の中に「電動車
椅子サッカー観戦」というワードが入るこ
とが私の目標です。そのためにも、チーム



>>> ボランティア活動・社会貢献活動



車椅子を自在に操りバスケットコート縦横無尽に駆け回りプレイする選手たち

●●● 改めて感じる、電動車椅子サッカーはスポーツであるということ ●●●

全員、一人ひとりが選手として成長し、強いチームになる必要があると思っています。

ところで、私はこの原稿の中で、「障害者スポーツ」という言葉をあえて使用していません。「障害のある人が参加する『スポーツ』」という言い方をしています。何が違うのかと思われるかもしれませんが、電動車椅子サッカーもサッカーや野球と同じようにスポーツです。

電動車椅子サッカーのプレーヤーたちは、重い障害を抱えており、日常生活でもさまざまな障害があるため、介助がなければできないこともたくさんあります。どうしても障害の特性や重さにより、身体的機能には個人差があり、それゆえにできること、できないこと、得手不得手もあります。チーム内でも、病気が少しずつ進行し、電動車椅子のジョイスティックを指で動かすことができなくなり、口の動きで操作をしている選手もいます。こういう話をすると、「障害があってもがんばっている」「重い障害がありながら、チャレンジを続けることに感動

する」と言われることが非常に多いのです。

しかし、これは強くみなさんに伝えたいのですが、チームとしては、それ以上に一人ひとりの長所や強みを活かすこと、課題をカバーすることを考えながら、選手の育成やチームの強化を常に目指しており、プレーそのもので観ている人に感動してほしいのです。

最近は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、チーム練習ができず、うずうずしていますが、そんな中でもLINEなどを活用して、チームの目標を話し合ったり、過去の試合を分析してチームの課題を見つけたら、電動車椅子サッカーワールドカップで海外のプレーヤーのプレーをチェックしたりすることで、プレーヤー個人の意識や能力を高めるために研鑽しています。

こうした日々を通じて、改めて、プレーヤーたちはアスリートであり、電動車椅子サッカーはスポーツなんだと感じているところです。私は監督として、近い将来全国大会でYOKOHAMA Bay Dreamが優勝することを目指していますが、ぜひそのときには多くのファンの方々にYOKOHAMA Bay Dreamを、そしてYOKOHAMA Bay Dreamのプレーヤーを熱く応援してほしいと思います。

●●● 今後、さらにチャレンジしていききたいこと ●●●

毎年、年に一度、全国の電動車椅子サッカーチームが集まり、日本一を決める日本

選手権が開催されるほか、県大会等が年に数回開催されます。この記事を読んでいたみなさんには、ぜひ一度、私たちの真剣勝負の試合を見に来てほしい。YOKOHAMA Bay DreamのホームページやSNSでも発信していきます。

監督という立場ですから、目指すのは、試合に勝つことです。そして、YOKOHAMA Bay Dreamから日本代表選手が現れ、世界を舞台に戦う選手に育ってほしいと思っています。

いつの日か、地域で定期的に開催される電動車椅子サッカーリーグができること、それが私の夢です。さらに、国の枠を超えて各国の電動車椅子サッカーのクラブチーム同士が対戦する国際リーグのようなものができ、YOKOHAMA Bay Dreamの一員として、世界を転戦できたらいいな。そんな野心があってもよいのではないかと思っています。

2013年いわゆる「障害者差別解消法」ができ、今、社会では障害のある人となんかの共生社会を目指した取組が進められています。「なんか、〇〇選手は去年よりうまくなったね」「散歩のついでに、ベイドリムの練習を見に行ってみようかな」「今度、友達を誘って試合の応援に行こう」そんな会話を通じて、電動車椅子サッカーが日本のスポーツ文化の一部として、人々の生活に浸透していくことも、共生社会を構築するための大きな力となるのではないかと思います。